The Japan Society for the Study of Education

体性感覚の復権
——バランスの回復をめざして——

本田和子
（お茶の水女子大学）

(1) 問題の限定.

子どもたちの現在が、過剰なまでの視聴覚メディアによって、呪縛され変容を余儀なくされているとは、夙に指摘されているところであるが、こゝでは、それらの現象及び功罪に関する一般論を避け、次のように問題を限定しておきたい。

すなわち、①人生の初期に位置する幼い人々の生の現象と、それに特徴的な生活のありかたを、日常的なレベルでとらえ直すこと。②それらを通じて覚醒されたまなざしを用いて、彼らを取り巻く文化環境を問い直すこと。③それを、視聴覚文化との関連で考えること、の三点である。

(2) 幼い人たちの「しるし」.

幼児と生活を共有するとき、彼らを特徴づける幾つかの「しるし」に気付かされる。たゞし、これは、飽くまでも、対象的真理としてではなく、それをみつめる私ども大人の視野に「有徴化されて」浮かび上ってくる、という意味である。

先ず、「見える形」のものとして、日常的・具体的なレベルでそれをおさえるとするなら、例えば、次のような特徴を見出すことが可能である。①チョコマカと動き廻り、人やものに接近して触り、密着する。（空間、身体性、感覚にかゝわる特徴）②現在に執着し、瞬間に滞在する。（時間にかゝわる特徴）③こわし、まぜ、組み変える。（秩序とのかゝわり、アモルファスなものへの愛）など。

彼らの生が、肉体と言語のどちらの次元により多く展開されるかと言えば、それは、言うまでもなく前者である。と言うより、肉体の次元で「有徴化されやすい。」日常的なレベルで、上記のような特徴が、私どもの意識に顕在化されるのが、その証である。

(3) 現状への問い.

人生の初期に展開される「生のかたち」が、肉体のレベル、とりわけ、静止よりは運動、距離的には接近と密着、分類よりは融合などの特性において把握されやすいものであるとすれば、彼らの生の展開において、触覚、皮膚感覚、運動感覚的なものをも含んだ体性感覚の位置を、改めて、見直す必要があろう。そして、視聴覚メディアとの過剰なかゝわりを要請される現代が、彼らの生のバランスを狂わせていくであろうことは、容易に推測される。視覚や聴覚は、対象との間に距離を必要とする遠距離感覚であって、それらが優位に働くときは、識別力が増して、理性的、分析的な知覚の発達が促進される。他方で、体性感覚が活発に働くときは、イメージ的な全体性を持った世界把握、いわゆる宇宙的な知覚が成立すると考えられる。とすれば、この体性感覚的世界把握は、単に乳幼児に限られず、人間の「生きられた経験」を支える。視聴覚メディアの問題は、それとのバランスにおいて、問い直される必要があろう。

NII-Electronic Library Service